

特集

— 高橋智子先生と考える —

「特別支援教育のために 図工・美術でできること」と

開隆堂出版



LINE公式アカウント



図工・美術の授業に役立つ実践事例などの最新情報をお届けします！



@741etmvy

図工
美術

特集

高橋智子先生と考える

特別支援教育のために

図工・美術でできること

特別支援教育というと、

「何かとても難しいことを

しなければいけないのではないか」

「専門的に学んでいないので

よくわからない」

「指導するのが怖いし、不安」

などと思ってしまう

先生もいるかもしれない。

特別支援教育における図工・美術の授業研究に

取り組んでおられる高橋智子先生は

「子どもの実態に寄り添って、

その子が何を必要としているのか、

何を育むべきかを考えることが大事」

「障害のある子ども達に対して

『できないこと』ではなく、

『できること』に注目しよう」という。

高橋先生のお話から、特別支援教育とは、

目の前にいる子どもを

きちんと見つめること、つまり教育の根本を

目指すことなのではないだろうか、

と考えさせられる。

今回の特集では、高橋先生と一緒に

他分野の方との対談を通して

特別支援教育について考えていきたい。



- 15 ちかごろ気になる…
・桜の名所で見つけた掲示のヒント【森久根】
・魅力的な先生【坂泉美】

- 16 子どもと美術館
・川越市立美術館【副館長(学芸員):折井貴恵】

- 20 題材アレンジレシピ
・[小学校] へんてこ山の物語【鳥居綾】
・[中学校] 私章～私こういうものです～【野村清志】

- 24 先生のため
・私達を毎日温かく迎えてくれた校門【上廻哲也】

たかはし ともこ
高橋 智子

静岡大学 教育学部・大学院教育学研究科 准教授
大分県出身。2006年に静岡大学教育学部に着任。
専門分野は、美術科教育学。小学校、中学校、特別
支援学校での造形・美術教育研究に幅広く関わり、授業
づくりに取り組む。近年では、障害等のある児童生徒の
図画工作科及び美術科における表現や鑑賞に関する
題材研究や指導支援等のあり方について研究している。



CONTENTS

- 02 特集 高橋智子先生と考える 特別支援教育のために図工・美術でできること
- 04 高橋智子 × 手塚貴晴・手塚由比 対談インタビュー「あらゆる人が共に生きることのできる社会をつくるために」
- 10 特別支援教育をふまえた図工・美術の授業づくりとは 【高橋智子】
- 14 美の姿
・ 佐世保独楽 【大坪圭輔】

美術科教育学の中でも特別支援教育の図工・美術を研究する

高橋智子

〈静岡大学 准教授〉



世界で最も優れた学校に選ばれた「ふじようちえん」を手掛けた

手塚貴晴・手塚由比

〈手塚建築研究所〉



「あらゆる人が
共に生きることのできる
社会をつくるために」

対談
インタビュー

てつか たかはる
手塚 貴晴

てつか ゆい
手塚 由比

OECD（経済協力開発機構）と UNESCO（国際連合教育科学文化機関）により世界で最も優れた学校に選ばれた「ふじようちえん」を始めとして、子どものための空間設計を多く手掛ける。建築設計活動に軸足を置きながら国内外各地にて子ども環境に関する講演会を行なっている。



「子どものための
ものをつくらう」
と思わないほうがいい

高橋 手塚さん方の手掛ける建築は、形やものをつくれればいいということを感じないんですね。そこに人がいることで、新しい意味や形が生まれてくるような空間づくりをされているのではないかと思います。

手塚由 建築って、そこにいる人が何かしたくなったり、心地よかったりとか、

そういう気持ちを引き出すための道具みたいに使っています。人が使った初めて意味が生まれるものだから、その人が使うときに、走りたくなったり、何かしたくなったり、のんびりしたくなったり、そういうことが起きることをすごく大切に考えています。

幼稚園をつくる時だったら、自分が子どもだったらどうしたい、ここで何したい、みたいなことを考えながらつくりま

高橋 それは教育の場でも絶対必要だなんて思っています。子どものことを考えながら、学習環境などに大人が積極的に関わって、変えていかないといけないんじゃないかと思っています。

手塚貴 「子どもをその気にさせる」って、なかなか難しいことなんだけど、実は簡単なこともあるんですね。みんな世話焼きすぎるんですよ。何か教えてあげなくちゃと思うと、下心が透けて見えてきちゃうんですね。教えようと思わないって、意外に大事なことだと思いますよ。

それから、役に立たないものって実はいいんですよ。山や川へ行くと、石や水や葉っぱがあるじゃないですか。それって全部子どものためにできていないですよ。子どものことを考えているものほど、ろくなものがないですよ。子どものことを考えてつくった遊具とかも、ろくなものがなくて。本物に触れるって大事

なんです。

おままだのおもちゃで、にんじんを切ったら半分になるやつがあるじゃないですか。中はマジックテープで接着されていて、あれは「よく切れたね」ってなるだけですよ。それはもう単にトレーニングなんじゃないかと思う。

それなら、本物のにんじんを置いとけばいいじゃない。にんじん1本の方が安いし、腐る前に食べちゃえばいいしね。きょうとたくさんの方を発見しますよ。子どもは自分でものを発見しながら育つようにできているんですよ。

だから、どうやって遊ばせるのかを考えると、「子どものためのもの」をつくらうと思わないほうがいいと思う。

手塚由 スタジオジブリの映画『となりのトトロ』で、サツキとメイが古い家に住んでいて、そこでいっぱい遊んでいるじゃないですか。あの家は全然子ども用にできていない。でも、子ども達はものすごく想像力を働かせて、豊かに遊んでいるじゃないですか。ああいうのが大事だと思うんですよ。

高橋 私も田舎育ちで家の周りが山や川だったので、そうした自然が一番の遊び場だったんですよ。幼稚園でも遊具はありましたけど、遊具よりも土を触ったり、木の皮の匂いを嗅いでいました。その匂いを今でも覚えているんですよ。

手塚貴 ふじようちえんの園長先生がよ

「子どもはもらったものをすぐなくす。だけど、自分の拾ったものではなくさない」って言っています。自分で自発的に選んだものは大事にするってことです。要は、拾いたくなるようなものがある状況をつくるのがすごく大切ってことです。

高橋 病院内にある院内学級に在籍している子ども達は、自由に外へ行くことができないことが多いので、そうした場合は、教員が環境を整えたり、本物に出会わせたりすることが大切だと感じています。

子どもは
自分で発見できる
場所がいい

高橋 今日は手塚さんが手掛けた「PLAY! PARK」に編集者と遊びに行ってきました。さまざまな仕掛けがされているとすごく感じました。子どものための仕掛けというわけではなくて、子どもも大人も遊べるように考えられているなと思いました。私達も楽しくて、ピューンと新聞紙の上に乗ったり、子どもと遊んだりしてきました。

手塚貴 「PLAY! PARK」は、最初にお話をいただいたとき、「子ども博物館をやってほしい」と言われたんですよ。子ども博物館なんて言うと、子どもは勉強しなくちゃいけない場になる。



例えば、スーパーマーケットの店員さんの話をしたり、消防士さんの体験をしたりとか。親から見ると楽しそうにやっているように思うけど、子どもからしてみればなんでこんなことをやらされるんだろうと思うでしょう。私だったら嫌ですね。あと、子どもを置いて親がどこかへ行って、子どもを預けるだけだったら単に塾とか託児所でもいいですね。

子どもが自分でいろいろなものやことを発見するような場がいい。そういう場を求めるんだったら森とか山に行けばいいんだけどね、それが難しいこともある。私は動物を飼ったらいいんじゃないかって提案したんだよね。だけど、動物は、高いじゃないですか（笑）。ライオン1頭買うのも大変ですよ。肉をいっぱい食べるし。

「PLAY! PARK」には、子ども達が自由に遊べる大きなお皿のような場があります。初めはお皿の外から子どもを見ていた親も次第にお皿の中に入っていくような場。つまり、その場は何かを教えてやらせるような場じゃないということですよ。

みんな子どもにいろいろなことをやらせすぎだと思う。サーカスをやらせているんじゃないんだから。あそこ（PLAY! PARK）にいる子ども達は、何かしろって言われてないけれども、勝手にトイレトベーパーの中に潜っていますよ。親から何かしろって言われるのは嫌なんです。遊びに真剣なんです。

けれど、実は真剣に遊ぶのって一番大事なことなんです。

高橋 子ども達がたくさんいる中で、大人の私達も遊んだし、子どもを含めいろいろな人と関わりたくなったり、遊びたくなりませんでした。

大きいお皿の場には緩やかな傾斜があるじゃないですか。あれを1歳ぐらいの子がハイハイをしながら途中まで上がって、そして途中で滑りながら下がって

く。それを何回もくり返していましたね。ついには一番上に到達して、楽しそうにしていました。子どもが自発的に学んでいる様子を目撃したんですよ。

手塚貴 だけどね、みんな「危ない」とか言うでしょ。建物でスロープがあると「スロープで人が怪我したらどうするんですか」って言われることがある。だけど、スロープって街の中にもたくさんあるじゃないですか。子どもってね、スロープが大好きなんです。上がったたり下がったりです。

手塚由 当たり前の感覚なんですけど、みんな忘れちゃう。まだ子どもだから、過度に安全にしくちやうって思ってしまう。自分が子どもだったときには、そんなに気にしなかったはずなのに。大人になっちゃうと、子どもを大人と別物として考えてしまつた。

(※)「PLAY! PARK」は、手塚建築研究所が内装設計を準備、2000年の正月にオープンした「未知との出逢い」をテーマとした子どものための屋内広場（遊び場）。

**問題なのは、人に迷惑を
かけなくていいように、
この社会が
なっちゃっていること**

手塚貴 日本の社会では、バリアフリーということとは自分達は何もしなくていいんだって思っている。逆に言うとバリアフリーじゃないところに行ったら諦めてね。

前に、車いす利用者が階段のあるお店で入店を断られたっていう話を聞きました。

みんなで抱えて上げればいいじゃないかと思うんです。「スロープがないから、あなた達が何もしてくれない」ということではない。スロープがあっても、スロープがなくても、人に対する態度で同じでしょ。「みんなで助け合おう」ということ。これね、すごく大事なことです。問題なのは、人に迷惑をかけなくていいように、この社会がなっちゃっていることですよ。みんなが迷惑をかけなくて、障害のある人達の面倒を見なくていいようにつくりかしてのが、今の社会。

みんなで手伝えればいいんですよ。駅のホームで駅員さんしか対応していかないとかおかしいじゃない。みんなで手助けすればいいじゃないかと思う。

高橋 わかります。目の見えない方が「点字ブロックの上だけを歩きたいわけじゃない」という話を聞いたことがあります。手塚さんのおっしゃっている通りだと思います。障害があつたとしてもいろいろなところに行きたいじゃないですか。あらゆる人々の可能性をひらいていくような環境（場）をつくっていく必要があるんじゃないかと思います。

授業も一緒じゃないかと思えます。多様な子ども達がいる、それぞれが自分の可能性をひらいていくような授業づくりが大切だと思っています。

幅広い
子どもの違いを
受け入れられるような
教育の場が大事

手塚貴 人間はね、カテゴライズしすぎだと思っんですよ。学校も同様で、なんかいろいろなカテゴリーでまとめている。でも同じ人間って一人もいないんですよ。

高橋 今のところ、学校はさまざまに分けざるを得ないのが現状です。手塚さん達の、人の可能性をひらいていくような考え方や場づくり、みんなが助け合えるような生き方について、柔軟に考えることができる場じゃないといけないと思います。

手塚由 幅広い子どもの違いを受け入れられるような教育の場って大事ですよ。

手塚貴 やっぱりね、もうそろそろ学校は、学年ごとに教室を分けるということ自体をやめなくちゃいけないと思う。

昔の寺小屋は、年齢に関係なくいろいろな子がいたわけですよ。そういう多様な人間関係の中で子どもは育ったんだと思っんです。それがよかったです。

私達がつくったプロジェクトを一つ紹介すると、寺小屋と同じような考え方を取り入れているインドのプロジェクト（「Jhamtse Gatsal Children's Community」）があります。インドの奥地にある孤児院で百人以上の子ども達が



Jhamtse Gatsal Children's Community のイメージパース 手塚建築研究所 Tezuka Architects

身を寄せています。この孤児院では上級生の女の子が、小さい子を抱えているんですよ。明日試験なのに、赤ちゃんを抱っこしながら勉強しているんです。そんな環境で勉強しているにも関わらず、結果的に90パーセントの子も達が大学に進学している。子ども達同士で支え合う環境がそこでは当たり前になってきている。そして、結果的に自主性を身につけているんです。

高橋 人を分けない、共に生きる環境であることが素晴らしいと感じます。小さい子どもも、大きな子どもも、一緒にいて、勉強しているときに隣にいてもいいわけですよ。

手塚由 そうですね、当たり前になっていることができていますよ。大きい子が小さい子の面倒を見て、互いに助け合う。相互に認め合い頼り合う関係性があるのがすごくちゃんとできている。そういう関係性があるだけで、子ども達の顔が明るくなるんですよ。

高橋 私も多様な人達を認める場というか、そうした教育のあり方っていうのは絶対必要だなと感じているところです。

図工や美術の授業を行うとき、いろいろな子がいるんですよ。最初から活動に積極的な子もいれば、材料を手にして集中しながら触ったり見たりしている子もいれば、その場でぐっぐっとして周りの様子を伺いながら静かに座っている子も



いる。昔は、活動に取りつかれずじっと

座っている子を見て、心配したり焦ったりしてました。だけど、保護者の方から「先生、大丈夫。活動していなくてもこの子がこの場にみんなと一緒にいることが大切

なので大丈夫ですよ」って以前教えていただいたことがあって。本当にその通りだと気づかされました。いろいろな子がいて、それぞれにここに居る意味があって、そうしたことが当然なことなのだとも再確認できました。

手塚由 みんなが同じときに同じことをやらなければいけない、ということじゃなくっていいですね。

手塚貴 あとね、教室に行きたくない子どもを無理やり教室に居させない方がいいと思うんですよ。「好きな場所に行きたいよ」って言ってあげたらいい。大人はそういう子どもが行きたくなるような場

所をつくってあげればいいんだと思う。

ふじようちえんが面白いのは、部屋が分かれていないから子どもが脱走しちゃうんですよ。脱走して、行くところがなから、結局自分で戻ってくる(笑)。

あと脱走した子同士で仲良くなると、そこにコミュニティが生まれる。子どもはちゃんと自分で何が欲しいかわかっているんです。自分で「選択」しているということが大事。

多様性の一番根本的なところ、一番大事なものは「選択」なんです。自分が選ぶことができるかってこと。

高橋 身体を動かしたり子どもと一緒に活動することがあります。動けないから何も感じていないとか選べないとか決めつけるのではなくて、じっくり観察していると、本当に微細な動きで反応してくれていることに気づくんんです。発信してい

るんですよ。

どんな子ども達も「選択できる」っていうことを教員や大人が気づいてあげることってすごく大切だし、その機会を掴み取っちゃダメだなんて思います。

手塚由 ですよ、当たり前にもいろいろな子がいて、いろんなことをして、これでもいいんだってなることが大事ですよ。

高橋 「内と外」っていう概念があるとすれば、脱走した子達にとつて、その脱走したところが外じゃなくって、その子達にとつての、内でもある。そういうのが柔軟に入れ替わるみたいなことが大事。そういうフレキシブルな場づくりや考え方は教育にも必要だなんて思っています。

一見、

役に立たないものもいい

手塚貴 箱はいらないんですよ。箱をつくると、仕切ってしまう。箱に入れるためには、同じじゃないと面倒でしょ。昔はね、箱に入らないと切り捨てていたかもしれないけれど。実はね、その切り捨てていた人が本当はすごく大事な存在なんです。私ね、世の中に無駄な人って一人もないと思ってる。

「一見、役に立たないものもいいんだ」ってよく言っんです。例えば、持っているものだって同じだと思っんです。なんで高橋先生はイヤリングをつけているの。



邪魔じゃない。イヤリングなんかいらなでしょ。でもやっぱりそういう小さなことで心が温まるじゃないですか。

高橋 無駄なものも含めていろいろなものを包み込むのが、図工・美術だと思っています。

でもやっぱり大人がしっかり意識しないと、「こうでなくてはいけない」みたいな、大人の価値観の押しつけみたいな感じになっちゃう。

手塚由 図工や美術を私はすごく大事だと思っっています。うちの娘は、ずっと落書きしている子だったんですが、図工や美術の時間は本人がとても輝いて描いたりつくったりしていましたね。その経験が今でも役に立っているみたい。

子どもは

できるだけ早くから
失敗したほうがいい

手塚貴 社会が本当に必要なものと、学校の教育で育もうとしてるものが、ずれちゃっていると思っんだよね。



高橋 ずれが生じると子どもはそれに戸惑いますよね。子ども達も社会に出たときに、ギャップを感じるようになってしまう。

図工はつくりたいものやことに向き合
い、そのつくる過程で失敗しつつ、でも再
度立ち向かって夢を実現し、そしてまた
新しい夢や願いをつくっていく。そういう
プロセスのくり返しだと感じています。
まるで、人生を学ぶような時間だと思っ
ているんですね。生き方を学んでいる
というか。

手塚由 ふじようちえんの園長先生が、



当たり前に、いろいろな人が共存してい
る環境が大事なんだと思いますよ。

境界をなくす

手塚貴 人を邪魔だと思う人っていうのは、自分もいつか邪魔に思われるかもし
れないってことがわかってないんですよ。
だけど、邪魔じゃないですよ。すべてに意
味がある。すべての命には意味がある。

高橋 そうですね。私もそう思います。
みんなが邪魔だと思わない、そういう社
会にするためには、どうしたらよいと手
塚さん達は考えますか。

手塚貴 やつぱり「境界をなくす」のが一
番いい。多様な人がそこにいること自体
が大事なんです。それがたくさん糸(関
係)で繋がっていったら、社会を構成する。
糸の一部を引っ張ると、他の部分が連動し
て、何かが起こるのは自然なこと、そ
うなればいいと思います。

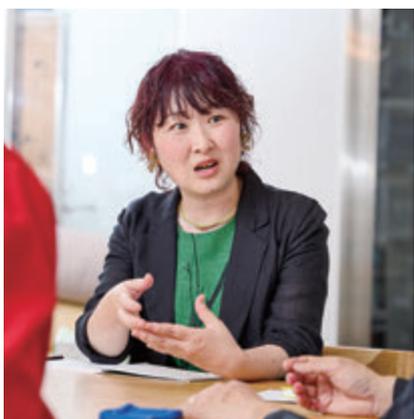
高橋 「ここにいていい」と思えること
もすごく大切だなと思います。

手塚由 ごちゃ混ぜの場をつくることで、
いろいろな人が入れる場ができるんです
よね。

高橋 分けられて隔離されると、いろい
ろなものやことが見えづらくなるじゃな
いんですか。見えづらいと理解できなくな
ってくる。

手塚由 だからできるだけ、建築でもな

んでも、境界がなくて、空間が繋がって
いて、互いに見える、そういう環境づく
りが大切だと思う。



高橋 多様性の時代に、学校教育がどう
あるべきか立ち止まって真剣に問い直す必
要があると思います。

先生方は、子ども達のことを思い、日々
努力されていますが、いまだに図工や美
術に対して誤解もあると感じています。
子どもの実態に合わない一方的な指導に
なったり、自由放任的な指導になったり
など、課題や誤解もあるように思いま
す。教員は、子どもの多様な個を認め
る存在でなければならぬといつも感じ
ています。

さまざまな境界をつくるのではなく、
時代や社会に合わせて、柔軟に授業や子
ども達の捉え方を変化させていきつつ、
子どもと一緒にものやことをつくること
を楽しんでいきたいなと思っています。

本日はありがとうございました。



高橋智子先生と考える「特別支援教育のために図工・美術でできること」

特別支援教育をふまえた 図工・美術の授業づくりとは 【高橋智子】

特別支援教育における
図工・美術の
授業づくりで
大切にしたいこと

図工・美術の授業づくりに、苦手意識をもっている先生方がいるかもしれません。授業づくりに対する課題はさまざまかと思いますが、問題意識や課題を感じることとはとても重要なことです。課題を意識することができれば、「何となくでも授業ができてしまう危うさ」が図工・美術にはあります。教員の理想とする作品を子どもにつくらせたり描かせたりしてしまうような一方的な授業になつては、本末転倒であるといえます。時代や社会、子どもの実態により、授業のあり方は変化し続けます。こうした変化に対応するためには、常に学び続け問い続ける教員であることが重要です。図工・美術の時間は、多様な子ども達が一堂に会し、空間や時間を共有しながら、自他の存在や個性を認め、さまざまなものやことを創造することができます。それは、子どもにとっても教員にとっても、新たなものやことに出会えたり、自由に自己の生き方を探索したりする、楽しく豊かに学ぶ時間であるといえます。図工・美術での学びが、子どもが多様な人達と豊かに生きていく力の育成につながることを意識しつつ、授業のあり方についてしっかりと考えていきましょう。



障害種ごとに 題材が決められている わけではない

図工・美術の授業づくりを三つの段階（授業前、授業中、授業後）に分けて考えると、課題やそれを解決する手がかりを見つけやすいです。また、授業づくりの際、重要になるのが題材研究です。特別支援学校や学級において、実施すべき題材が決められていたり障害種ごとに題材が決められていたりするわけではありません。授業は、教員と子ども達の協働による営みであり、常に変化し続けるものです。教員には、対象となる子どもの実態や時代や社会の動向に合わせて、常に新しい題材を提案し研究していく力が

求められます。図工・美術では、個性に着目しながら個の可能性を広げることが出来ます。教員の思い込みによって子どもの存在が置き去りになってしまふような一方的な題材となるのではなく、対象の子ども達に寄り添いつつ、一人ひとりが主体的に取り組めるような題材を検討していきたいです。その際、重要なポイントがいくつか考えられます。ここでは、三つ紹介します。

ポイント① 子どもの実態から 考えよう

題材研究時や授業過程において、重要となるのが子どもの実態把握です。障害のある子どもを対象とする場合、障害等による心身上的困難さや困り感に着目しがちです。しかし、表現や鑑賞の活動では、子どもの障害等から生じる困難さを子どもの可能性に変化させることが可能です。「○○ができないから表現する」とは無理だろう」と考えるのではなく、「○○という特徴や実態があるから、いろいろな表現や鑑賞の可能性が広がる」というように子どもの実態を捉えていきたいです。また、実態把握は、授業前のみならず、授業中や授業後にもくり返し行っていく必要があります。子どもの実態は、常に化するからです。子どもの

実態を固定化するのではなく、子どもの視点に寄り添い検討していきたいです。また、一人で行うのではなく、他の教員や保護者と情報共有することもとても重要です。子どもが主体的に取り組める題材を検討するためには、学校生活のさまざまな場面で多様な視点から子どもの様子を観察し、関わるのがとても重要です。多様な視点から多角的な実態把握を心掛けることで、図工・美術の授業づくりのヒントが見つかるはずです。

ポイント② 題材目標を工夫しよう

特別支援学校においては、子ども達の心身上的特徴や障害の範囲はさまざまであり、授業への意欲や造形活動などに関わる身体上的特徴も一人ずつ異なります。身体的、知的、精神的な面から多様な実態のある子どもによって学習集団が編成され、その多様な集団を対象として授業を実施することが多いです。図工・美術では、多様な実態の子ども達が同一題材に取り組むことが可能です。障害種などで集団を分けて孤立させるのではなく、多様な実態のある子ども達が一緒に取り組める題材を提案したり、目標を設定したりすることが出来ます。同一題材を実践する場合、集団全体の目標として全ての子どもの汎用性の高い目標を立てると



よいです。例えば、異学年合同で実践する場合は、クラス全体の目標（観点別評価）を小学校低学年に合わせるなどです。年齢や障害等の実態に広がりがある場合は、学年が低く、障害等の状態が重い子どもに合わせると全員参加型の授業を実施しやすくなります。なお、集団全体の目標とは別に、個の実態（学年、障害等の状態）に合わせて、個別の目標を別途設定することで個の可能性を広げることが出来ます。さらに、授業における子どもとの関わりを通して、目標や方法は変化します。大切なことは、目の前の子どもに状態に寄り添い、目標や指導支援を柔軟に捉えていくことです。子どもの実態を把握した上で、個の可能性を広げるような集団全体の目標や個別目標を考えていきましょう。



ポイント③ 環境設定や用具材料を工夫しよう

多様な実態の子ども達が共に活動する場合は、自主的に材料や用具を手に取り、楽しく交流できるような環境設定を心掛けたいです。題材に合わせて子どもがワクワクするような装飾を教室に飾ったり、材料置き場と席を行き来できるスペースを確保したり、材料や用具を自主的に手に取れるような置き方にしたり、自分の意思で選んだりつくったりできるように材料や用具を加工したりなど、さまざまな工夫が可能です。また、子どもの力が発揮されやすい材料や用具を選択して用意することも大切です。例えば、手や指の力が弱い子どもの場合、紙にマジックで描くよりも、ビニールシートを支持体

にしてマジックで描いた方が、つるつるとして滑りやすく軽い力で描けます。少しの工夫が子どもを力発揮するきっかけになります。

今回、三つのポイントを紹介しましたが、他にもさまざまな工夫が考えられます。授業づくりを通して、我々は子どもや自身の可能性を再発見するはずで、子どもの成長を願い、共に考え、共に学び、教員自身も常に成長し続けます。授業づくりは、教員や子どもが共に作り出す豊かな共創のプロセスといえます。

インタビュー取材を経て

手塚建築研究所が手掛ける建築は、「もの」として存在しているのではなく、すべての人にひらかれ、そこに集う人（個）が自分の可能性を紡ぎ出すことができる「場」として存在していると常々感じています。建物に内と外があるならば、その内と外さえもそこに存在する人の考え方により柔軟に入れ替わり、貴晴さんと由比さんがつくりだす場（かたち）の中で、多様な人々が自分のかたち（意味や価値などの「こと」）をつくりだしている。こうした考え方は、図工・美術の授業づくりにとてよく似ていて、共通点が多いと考えていました。

今回、貴晴さんと由比さんにお話を伺う中で、お二人の建築に対する考え方や未来への願いをお聞きすることができました。「全ての命に意味がある」「いろいろな人がいて当たり前、必要としていることは個により異なる」と力強く語る姿から、お二人の場づくりの中心には多様な人々の存在が常にあるからこそ、つくりだされる場が多様な人を受け入れ、共に関わり合いながら豊かな「こと」を生み出す場となっていることに気づかされました。インタビュー前に、編集者と共に足を運んだ「PLAY! PARK」でも、それを実感しました。「PLAY! PARK」で目に飛び込んできたのは、白くて柔らかい素材でつくられた大きなお皿。円型の場には始点や終点はなく、

全ての人を優しく受け入れるような空間が内と外にひらかれています。また、その場にはさまざまな「しつらえ」が見え隠れします。抵抗感のある緩やかな傾斜や五感を刺激する材料、空間に響く音など、特定の誰かのためではなく、すべての人がワクワクして互いに楽しめる場がそこにありました。我々自身、自分や他者の存在を身近に感じつつ、諸感覚を働かせながらさまざまな方法で人々と交流し、自然と笑顔が溢れていました。こうした体験からも、お二人が建築を通して、人間の生き方や考え方、多様な人々が共に生きるこの意味を問い続けながら場

をつくり続けていることを改めて実感しました。

特別支援教育における図工・美術の授業も、多様な個の存在や生き方を認め、自分なりの新たな意味や価値を自らつくりながら、他者と共に豊かに生きていく力を身につけていく学びの場であるといえます。多様性の時代に、図工・美術の授業では、そうした力を育成する場となり得ることを我々は自覚することが大切になるでしょう。また、多様な子ども達が障害の有無に関わらず、共に学習できるような授業づくりが可能になるはずで、こうした考え方は、通常学級にも汎用できるものであり、すべての子どもが意味ある存在として受け入れられ、他者と共に豊かに未来を切りひらく場となるような授業のあり方を問い続けていくことの必要性を改めて感じました。



PLAY! PARK 「くしゃくしゃおぼけ」 撮影：吉次史成、提供：PLAY!

好評発売中!

授業づくりの
考え方、指導方法、
15の豊富な
実践例まで
すべてを掲載!



高橋智子著
『実践から考える
特別支援教育のための
図画工作・美術の
授業づくり』
開隆堂出版

高橋先生が
実際に行っている
実践例を紹介!!

実践例

「はっけん! 海の生き物」〈立体〉

時間数

2時間

準備する材料や用具

- **本体の材料** ビニールシート 油性ペン
- **中に入れる材料** 綿 ストロー すずらんテープ 紙粘土 色紙 色セロハン スポンジ ひも類 緩衝材 (プチプチマットや発泡スチロール) アルミホイル など
- **用具** はさみ ホチキス 紙コップ トレイ 両面テープ 補助具 など

活動内容や目標

本題材の目標は身近な材料を使って、ビニールシートの形や材料の触り心地からつくりたいものを考えて、さまざまな材料に触れながらつくることを楽しむことである。ビニールシートに油性ペンで海の生き物を描き、それを2枚合わせて端をホチキスや両面テープでとめ、さまざまな材料をビニールシートの中に入れ、クッションのような立体的な形をつくる。

題材設定の理由

作品の大きさや難易度は各児童の実態に合わせて柔軟に対応できる。例えば病弱の子どもは、生活及び学習経験が少なく、身体的な制限があることが多い。こうした実態を受けてさまざまな材料、技法との出会いや個人の能力に応じて試行錯誤できる内容となるように考え、表現のしやすさや諸感覚を働かせることができるような材料を選んだ。ビニールシートは紙に描くよりも弱い力で描画が可能であり、描き心地もよい。また、匂いが夏のプールを想起させる。外出が難しい子にも夏の季節を感じてもらいやすいのではないかと考え、そのようなイメージから夏の生き物にした。

活動の流れ

1 描く



描くことが
難しい場合は、
準備した形から
選んでもいいね!

2 切る



補助具で切ったり、
シートを先生に
持ってもらったり
するのもいいね。

3 とめる



ホチキスの
補助具を活用したり、
先生と一緒に
ホチキスを押ししたり
してもいいね。

4 材料を選ぶ・入れる



材料を
選ぶことが
大事だよ。

完成



「佐世保独楽」



[佐世保独楽／高さ15cm]

佐世保独楽は長崎県佐世保市を代表する郷土玩具であり、県の伝統的工芸品に指定されている。喧嘩独楽とも呼ばれており、独楽を投げ回し、ぶつけ合って遊ぶ。大きさはさまざまであるが、手にすっぽりと収まるぐらいが丁度よく感じる。この卵型のような独特な形は、投げ回しやすいという特徴がある。また、先端の鉄製の剣は喧嘩独楽の命である。

勝負の方法はまず、「息長勝問勝競へ」という掛け声に合わせて、最初は一斉に独楽を回し、回っている時間の長さで順位を決める。次に、下位の者が回した独楽に向けて上位の者が自分の独楽を投げ当てて、相手の独楽を弾き飛ばし、最後まで回っていたら勝ちとなる。中でも、猛者が独楽を投げると、剣が相手の独楽に当たり、場合によっては独楽が割れることがある。相手の独楽を割ったらその剣は戦利品として割った側のものになる。

今では、縁起物として飾られるだけになっているが、かつては子ども達にとってもちょっとした危険性もあるスリリングな遊びであった。

(*「どれだけ長く回せるか全身全霊をかけて勝負しよう」という意味が込められている。

大坪 圭輔

武蔵野美術大学 名誉教授

造形美術教育における実践研究、

特に初等・中等教育段階での造形能力の発達と

その教育方法について研究。

ちかごろ 気 になる...

桜の名所で見つけた掲示のヒント

北海道札幌市立八軒小学校
教諭 森 久根先生



私は小学1年生の担任をしています。子ども達が入学して初めての図画工作の授業で、おひさまの絵を描くことにしました。おひさまはどの子も親しみやすく感じ、簡単な形なので手を大きく動かしてクレヨンで描くことができると考えました。また、仕上がった時に明るい色合いになるため、参観日に保護者が来校した際に掲示しておけば、教室が明るい雰囲気になりそうだと思います。

子ども達は、思い思いの形や色でおひさまを描いたり、余白には自分の好きなものや模様を描いたりして、一人一人の味が滲み出た作品となりました。廊下に掲示してみると、他の先生方から、「いいですね。」と声をかけられ、うれしい気持ちになりました。もっと子ども達の作品を通して、他の先生方と交流したいという気持ちが芽生え、さらに注目してもらえるように作品の掲示の仕方

も工夫してみようと考えたのです。

さて、今まで感覚的に行っていた掲示作業ですが、みんなの心に留まる掲示とは、どんな掲示だろう？ そう考えながら、GWに訪れた桜の名所に、具体的なヒントがありました。

一つ目のヒントは、函館市にある五稜郭公園で見つけました。ここには約1500本の桜が公園

を囲うように植えられています。五稜郭タワーに上って桜を見るとピンクの星型に見えるのですが、土塁の上を歩くと足元に桜の海が広がって見えるのです。桜の圧倒的な質量と、視点を変えた時の見え方の違いに目を奪われ、掲示のヒントにと思いました。

二つ目のヒントは、松前町の松前公園で見つけました。松前城跡の周囲には約250



種類の桜が植えられています。桜の名前や由来が掲示されているので、掲示板を読みながらお気に入りの桜を探しました。さまざまな個性のある桜を見る面白さや、説明を読むことで増す楽しさを味わうことができ、これも掲示に生かせそうだと感じました。

これらの桜から得たヒントをもとに、見た人の心に留まる掲示板づくりを目指していきたいです。

魅力的な先生

愛知教育大学附属名古屋中学校
教諭 坂 泉美先生



教員として働いている今になって、自分が学生の頃に出会った先生方を思い出すことがあります。その中でも、私が魅力的だなと思っていた先生方には共通点があることに気づきました。それはたくさんの面白い

経験をしていたり、何かに熱中していたりしていたという点です。

例えば、高校の時の物理の先生からは、学生時代に自転車で北海道を一周したという話を聞きました。また、中学の時の美術の先生からは、陶芸の工房に弟子入りして仕事と両立しながら器の制作をしていると聞きました。私も教員として働いていますが、生徒と関わっていると、教員の何でもない話が意外と生徒の心に残っていると感じる場合があります。

教員になると日々の仕事にかかりきりになり、つい

自分のやってみたいことに費やす時間が減ってしまいます。しかし、自分のやってみたいことを追求したり、いろいろな場所に出かけてたくさんものを見たりすることが経験となって蓄積され、自分の豊かさにつながるように思えます。そういう先生は生徒にとっても魅力的に見えるのではないのでしょうか。

教員としての知識を深めていくことや授業の研究を重ねていくことが前提ではありますが、同時に自分のやってみたいことや楽しんでみたいことを存分にやって自分自身を豊かにし、生徒に接していきたいです。私も趣味の登山や旅行など、いろいろとやってみたいことにチャレンジしていこうと思います。



子ども と 美術館



川越市立美術館



川越市立美術館

副館長(学芸員)

おりい たかえ
折井 貴恵

川越市立美術館は、川越市市制施行70周年記念事業として、その10年後の2002年12月1日に開館しました。川越の観光名所である蔵造りの町並みから徒歩約10分、川越城本丸御殿や川越市立博物館などとともに川越城址(二の丸跡)に位置する建物は、周囲との調和を図った漆喰塗り、瓦葺きのデザインとなっております。

当館は「交流」をテーマに、地域や時代を含めたさまざまな交流を感じていただける身近な文化施設を目指し、活動しています。郷土ゆかりの作品を中心とする



川越市立美術館

〒350-0053 埼玉県川越市郭町2丁目30番地1

TEL: 049-228-8080

開館時間: 9:00~17:00(入場は16:30まで)

休館日: 月曜日(ただし、月曜日が祝日などの場合は開館し、翌日休館)、年末年始など



あいばらきゅういちろう
相原求一朗「雲動く」1986年

2000点以上のコレクションを順次公開する常設展示室、川越出身の洋画家相原求一朗(1918~99)を紹介する相原求一朗記念室、作品に触れて鑑賞することができるタッチアートコーナーを備えているのは、この規模の美術館としては特筆に値します。さらに企



ジュニアアートスクエア
「非水デザインにちょうせん！
プラバンストラップづくり」
(2023年8月)

画
展
示
室
で
は
さ
ま
ま
な
特
別
展
を
開
催
し、質の高い美術作品の鑑賞機会の提供に努めています。展示と並行して、作品をより深く理解いただけるような講演会やワークショップ、学芸員による展示解説といった教育普及事業にも積極的に取り組んでいます。

そのほか、創作室や市民ギャラリーの貸し出しも行い、市民の創作意欲や発表意欲に寄り添いながら、その芸術活動を支援しています。



おもだせいじゆ けんぎのか
小茂田青樹「牽牛花」1924年



ジュニアアートスクエア「ふしぎなポーリングアート」(2023年11月)



ジュニアアートスクエア「新聞紙オバケにへんし〜ん!」(2023年10月)



当館の教育普及事業の中から、子どもを対象とした事例をいくつかご紹介いたします。

小学生を対象に毎月第4土曜日に実施しているワークショップ「ジュニアアートスクエア」は、毎回定員数を超える応募がある人気事業です。その時々で常設展・特別展を意識しつつ、子ども達が自由に発想を展開していける学校や家庭での活動とはひと味違ったアート体験を目指しています。例えば「ふしぎなポーリングアート」は、特別展「中村一美展」を鑑賞して抽象作品の中の諸要素を楽しんだ後、ポンドを混

ぜた絵の具を紙に注いで息を吹きかけるなどして作品をつくるプログラムでした。参加者の反応は大変よく、偶然性を受け入れながら納得のいく作品を完成させていく子どもの姿が印象的でした。



「教育課程に位置づけたバス利用による博物館・美術館活用」の様子

「教育課程に位置づけたバス利用による博物館・美術館活用」(通称「バス見学」)は、市立小学校全32校の6年生が校外学習として博物館・美術館を訪れるという、公立館をもつ川越市ならではの事業です。美術館という施設を初めて体験する児童が多いため、まず館職員がファシリテーターとなってみんなで一つの作品を鑑賞します。何が描かれているか、何に見えるかを尋ね、さらに作品のどういった表現からそう思ったのかを問いかけると、その答えに周りの児童も「確かに。」と同意しはじめます。30分という短い時間ではありますが、ときには思いもよらない意見が出るなどして、私達にとっても楽しいひとときです。鑑賞は自由であり、ものの見方はみんな違ってみんないいのだ、と感じてもらえれば同事業は成功だと考えています。

「川越市立小・中学校児童生徒県特選受賞作品展」や「川越市立中学校美術部展」など、美術館主催の展示会は、教員の働き方改革の影響で学校で制作した児童・生徒作品の展示会が減少傾向にあるという学校現場の声を受けて実現しました。

職員数6名で運営する小規模館ですが、当館の取り組みが子どもの感性や情緒の育成に少しでも寄与できれば嬉しく思います。



学校連携事業「ミュージアム×スクール」



「川越市立小・中学校児童生徒県特選受賞作品展」会場風景

へんてこ山の物語

福島県伊達市立
上保原小学校
鳥居 綾



主な材料・用具

四つ切り画用紙
鉛筆
水彩絵の具
クレヨン
カラーペン
スケッチブック

題材のねらい

「へんてこ山」という言葉から想像を広げること、いろいろな山の形を考えたり、表現方法を工夫したりしながら、自分なりの「へんてこ山」を表す。

アレンジする題材

令和6年度版
開隆堂出版
「図画」工作3・4下
46・47ページ
へんてこ山の物語

学年
第4学年

時間数
6時間



1 おかしの山

山の形や色などから、おかしの甘さやおいしさが伝わってくる。また、山の形をシンプルにしたことや背景を黒にしたことで、カラフルに混ざり合った山の色が一層際立っている。



2 きのこの山から木がはえてきたへんてこ山

きのこの形を山にしてしまおう発想と、そこから果物の木が生えてくるイメージを膨らませながら、これまで学習してきたにじみやぼかし、スクラッチなどのさまざまな技法を使っている。

写真 2 のアイデアスケッチ



題材名にある「へんてこ山」という言葉から想像を広げるために、形や色のもつイメージの違いやそれぞれの特徴に気づかせることが重要であると考えた。そのため、授業が始まる前に絵本の読み聞かせを行った。シンプルな文章で構成され、形や色の変化がとらえやすい絵本を読み聞かせすることで、児童の形や色への感覚を高めることができると考えた。本実践では、谷川俊太郎作の『ももこもこ』を読み聞かせた。児童達からは「面白い形だね。」「形がどんどん大きくなっていく。」「色が変わって飛んでいったー」などと、形や色のイメージに着目しながら、本題材で大切にしたい見方

や考え方を働かせていく様子が見られた。授業の導入では「ふつうの山」と「へんてこ山」の違いについて話し合った。「ふつうの山は凸型だけど、へんてこ山はでこぼこしている山かな。」「ふつうの山は緑色だけど、へんてこ山は色が多色に変わっていったら面白そうだな。」などと、それぞれの形や色の特徴や違いを伝え、そこからイメージをどんどん広げていった。アイデアスケッチを描く際には、どの児童も「へんてこ山」のイメージを黙々と描いていった。また、スケッチブックを見せ合いながら、描いた山の形やそこから生まれた物語について伝え合い、友達を表

現のよさを自分の表現へと生かそうとする児童も見られた。数分間の読み聞かせで、児童の資質・能力を育むことは難しいかもしれない。しかし、題材で育てたい資質・能力に焦点を当て、児童の気持ちやこれまでの経験や形や色のイメージと関連させるような絵本の読み聞かせは、題材のねらいを達成するための有効な手立てであると感じた。「この山はきのこの山でね、きのこの丸いところが膨らんで、りんごの木が生えてくるんだ。」などと、形や色を工夫することで、自分ならではの表し方を模索していく児童の姿を今後も求めていきたい。

学習の流れと子どもの活動

【授業前】絵本の読み聞かせ

1

「ふつうの山」と「へんてこ山」では何が違うのかを考える。

2

「へんてこ山」のイメージを広げて、アイデアスケッチをする。

3

画用紙に「へんてこ山」を描く。

4

互いの作品を鑑賞し、よさや違いについて友達と伝え合う。

題材の観点別評価規準

知識・技能【知識】

「へんてこ山」を描くことを通して、形や色などの感じがわかる。

知識・技能【技能】

前学年までの材料や用具の経験をもとに、表現方法を選んだり筆使いを工夫したりするなど、自分が考えた「へんてこ山」を工夫して表している。

思考・判断・表現【発想・構想】

「へんてこ山」という言葉から想像した形や色などをもとに、物語を思いつき、どのように表すかについて考えている。

思考・判断・表現【鑑賞】

自分や友達の「へんてこ山」のよさや面白さ、いろいろな表し方などについて感じ取ったり考えたりして、自分の見方や感じ方を広げている。

主体的に学習に取り組む態度

自分が考えた「へんてこ山」の描く喜びを味わいながら、絵に表す学習活動に進んで取り組もうとしている。

私章

～私こういうものです～

福岡教育大学附属
小倉中学校
野村 清志



主な材料・用具

タブレット端末
学習支援アプリ(ロイフォート・スクール
描画アプリ(アイビスペイント)
コンパス 定規
はさみ 色画用紙
折り紙 方眼紙

題材のねらい

自分のロッカーに貼る「私章」を
デザインする活動を通して、目
的や条件などから主題を生み出
し、豊かな発想や構想を練るこ
とができる。

アレンジする題材

開隆堂出版「美術1」
40・41ページ
ロゴマークで印象つける

学年
第1学年

時間数
9時間

学習の流れと 子どもの活動

【事前学習】
身のまわりにあるロゴマークや
都道府県章などを収集し、
表し方の工夫や
造形美を感じ取る。

1

「私」からキーワードを抽出し、
発想を広げ主題を生み出す。

2

スケッチをしたり、
紙を切ったりして、
試行錯誤しながら
形を構成する。

3

描画アプリを用いて
私章を制作する。

4

形や色彩が異なる私章を
複数つくり、
デザインを検討する。

5

完成した自他の作品を鑑賞し、
よさや工夫を感じ取る。

〈課題解決に結びつく資料収集〉

本題材の事前学習として、地域
で目にするロゴマークなどを撮影
したり、タブレット端末などで情
報収集したり、都道府県や市区町
村の「章」について鑑賞したりして、
デザインの成り立ちや表し方の工
夫について考えを広げさせた。ま
た、授業の導入でそれらを提示し
課題解決に向けて考えるための資
料にした。

〈目的や条件、対象の明確化〉

本校の廊下には生徒の個人用
ロッカーが設置されているが、出
席番号が表示された小さなラベル
テープのみが貼られ、誰のロッカー
なのか一目ではわからない。導入
の段階で「ロッカーに貼り、一目で
自分のだとわかる私章（マーク）
とはどのようなものか」を考えさ
せる。この投げかけにより、複雑
な図柄ではなく、シンプルであり、

なおかつ、ロッカーに貼ったときに
視認しやすいように形や色彩を工
夫しなければならぬことに気づ
かせる。

〈発想や構想も個別最適に〉

発想や構想の段階では、自分
名前の特徴や表現したいことから
主題を生み出し、形や色彩などの
効果を考えながらアイデアを練る。
紙に描く、タブレット端末で描く、
紙を切つて構成しながら考えるな
ど、個別最適な学びになるよう
主題へのアプローチの方法を広く
たことで、主体的に活動する様子
が多く見られた。

〈ICT機器ならではの利便性〉

制作にタブレット端末を用いるこ
とで容易に作品を複製すること
ができる。形や色彩の比較や検討が
しやすく、何度でもつくり変える
ことができる安心感もある。また、



「私の名前の由来の『華やか』から
花の感じをイメージしました。
線の太さを変えて動きのある形
を考えました。」



「『の』と『人』が重なり合っ
て三つあるようにして「のぞ
み」を表しました。」



「自分の名前の由来の『広く輝
く』を自分の性格と合わせて雷
で表しました。名前の頭文字の
Hを使って自分を表しました。」

タブレット端末を活用して、制作
状況を全員で共有することで、協
働しながら、主体的に課題解決を

題材の観点別評価規準

知識・技能【知識】

目的や意図に応じて形や色彩な
どが感情にもたらす効果を理解
している。

知識・技能【技能】

タブレット端末を活用して、主題
に合った表現方法を考えながら、
工夫して表している。

思考・判断・表現 【発想・構想】

「私」からキーワードを抽出して
主題を生み出し、わかりやすさ
と美しさなどの調和を考え、
表現の構想を練っている。

思考・判断・表現 【鑑賞】

身のまわりにあるロゴマークや友
達の作品のよさや美しさなどを
感じ取り、デザインに込められた
表現の意図や創造的な工夫を考
えるなどして、見方や感じ方を
広げている。

主体的に学習に 取り組む態度【表現】

美術の創造活動の喜びを味わう
とともに、主題に対して自ら試行
錯誤し、表現の意図や工夫など
について考えを広げて表す表現の
学習活動に主体的に取り組もう
としている。

主体的に学習に 取り組む態度【鑑賞】

身のまわりのロゴマークや友達
の作品の美しさ、デザインの表
し方の工夫などを感じ取りながら、
鑑賞の学習活動に主体的に取
組もうとしている。

図ろうとする生徒の姿も見られた。
完成した作品を印刷し、ラミネー
ト加工した後、ロッカーに掲示した。

色とりどりの「私章」が無骨なロッ
カーに映え、美術の力をみんな
味わうことができた。

私達を毎日温かく迎えてくれた校門

校門をくぐるときに感じた温かな気持ちを想像しながら描きました。毎日通るたびに変化している校門の周囲の様子をさまざまな季節の植物を描くことで表現しました。



私達を毎日温かく迎えてくれた校門 [水彩絵の具/38×54cm]
6年 米沢 七穂

先生のめ

小学校生活最後の学年の図画工作は「私のお気に入りの場所」の題材で始めました。思い入れのある場所をテーマに自分の思いを大切にしながら、表し方を工夫して絵で表現する活動です。

米沢さんは当初、思い出深い場所がたくさんあつて迷っている様子でしたが、よく考え、いつも温かく迎えてくれる校門に決めていました。その後は見たままの校門を描くのではなく、自分の気持ちや思い入れに重きを置いて、構図や形、色を考えて描いていました。思いを膨らませて嬉しそうに描く姿から、彼女の楽しい気持ちが伝わってきました。「空は青くなくてはいけない」「太陽はこう描かなくてはいけません」といった、こうあるべきだというバイアス（先入観や固定観念）にとらわれず、刻々と変化する周囲の様子を一つの絵に表現することに挑戦していました。また、「ここを失敗してしまつたから、この色を重ねてこうやって表そう」と、描きながら形や色の組み合わせを試行錯誤している様子が見られました。

作者自身の感覚や行為を通して試行錯誤を伴う取り組みは、造形的な見方や考え方が育まれていく大切な活動であると感じました。そして、バイアスにとらわれずに自身が見出した価値を自由に表現できる環境づくりの重要性を改めて実感しました。

(文) 埼玉県戸田市立笹日東小学校 教諭 上廻 哲也